

# 京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

## 1. 研究課題

ポスト・パンデミック世界の新しい社会・環境理論に向けて

New Socio-Environmental Theories for the Post-Pandemic World

## 2. 研究代表者氏名

香西豊子

Kozai Toyoko

## 3. 研究期間

2021年4月-2024年3月(1年目)

## 4. 研究目的

COVID-19は、世界中の国々の政治や経済のみならず、人々の社会観や自然観に根源的な動揺を与えた。人間社会の差別や経済状況に即して被害が甚大となる構造に加え、乱開発がもたらすウイルスと人間の頻繁な接触に警鐘が鳴らされている。だが、感染症の歴史は蓄積が膨大であるにもかかわらず、人文科学の研究者は新しい社会観や自然観や未来構想を発信できていない。本プロジェクトでは、感染症の歴史の文献、特に百年前のスペイン風邪の一次史料を、今回並びに次回の危機の際利用しやすいように整理、蓄積する。それと同時に、パンデミックに関するオンライン連続講演を発信する。これによって、さまざまな価値が動揺する時代に対応した、社会観や自然観の再構築にむけた人文学知を形成することを目的としている。

The COVID-19 pandemic has caused fundamental disruption not only in the politics and economies of countries around the world but also in people's perspectives on society and nature. In addition to the enormous damage caused to human society by discrimination and adverse economic conditions, alarm is being raised over the frequency of contact between viruses and humans brought about by overdevelopment. However, despite the huge volume of historical information regarding infectious diseases, humanities researchers have not been able to fully disseminate new perspectives on society, nature, and future planning. In this project, the history of infectious diseases, particularly the primary sources of the Spanish flu outbreak which occurred about 100 years ago, will be organized and compiled for practical use in both the current crisis and subsequent pandemic crises. Concurrently, the author will present a series of online lectures on pandemics. Thus, this project seeks to formulate humanistic

knowledge for the reconstruction of integrated perspectives on society and nature in response to a time in which various values are being shaken.

## 5. 本年度の研究実施状況

本年度は、10回にわたり、研究会を重ね、パンデミックの歴史的、社会的、哲学的な分析の手法について学んだ。研究班員以外では、写真家の渋谷敦志氏をお招きし、コロナ禍の病院で前線で働く看護師たちの様子を伺ったり、撮影された写真を見て議論をしたりした。また、医療の哲学を研究している村岡潔氏もお招きし、私たちが旧来、病気と名指しているものを、相対的に、また客観的に捉え直すあり方について学んだ。

## 6. 本年度の研究実施内容

2021-04-03 パンデミック班第6回研究会 藤野裕子著『民衆暴力―一揆・暴動・虐殺の日本近代』書評 発表者 藤原辰史 人文科学研究所 発表者 松村圭一郎 岡山大学

2021-04-19 パンデミック班第7回研究会 AIMによる体内のゴミ掃除という観点からみた対新型コロナウイルス戦略 発表者 宮崎徹 東京大学医学部

2021-05-17 パンデミック班第8回研究会 感染症史の論点(2) 発表者 香西豊子 佛教大学歴史学部

2021-06-14 パンデミック班第9回研究会 コロナ病棟の現場から 発表者 渋谷敦志 写真家

2021-07-05 パンデミック班第10回研究会 近世天草地方の疫病対策 発表者 東昇 京都府立大学文学部

2021-10-04 パンデミック班第11回研究会 「江戸時代の感染症」史研究の論点 発表者 海原亮 住友資料館主席研究員

2021-11-15 パンデミック班第12回研究会 人類学と人獣共通感染症：生権力に抗う（種間）倫理の探究 発表者 石井美保 人文科学研究所

2021-12-13 パンデミック班第13回研究会 『感染症と法の社会史』とコロナ禍 発表者 西迫大祐 沖縄国際大学

2022-01-17 パンデミック班第14回研究会 医学哲学の基本的スタンス：特定病因論と先制医療 感染症と生活習慣病を例に 発表者 村岡潔 岡山商科大学法学部

2022-02-14 パンデミック班第15回研究会 幕末期における「予防」概念の転回 発表者 香西豊子 佛教大学歴史学部

## 7. 共同研究会に関連した公表実績

3月22日に、オンライン講座として、写真家の新井卓が『「令和鎖国」日本の水際対策で引き裂かれる家族たち』というタイトルで報告した。報告に対し、石井美保、藤原辰史がコメントをし、一般公開をした。また、藤原辰史が『ポストコロナの生命哲学』（集英社新書、伊藤亜紗、福岡伸一と共著）を刊行した。

所内

学内

学外

## 9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数					
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	
学内(法人内)		9	1		2		61	4		13		
		(3)			(1)		(20)			(5)		
国立大学		2					13					
公立大学		1					12					
私立大学		3	1		1		33	10		11		
		(1)			(1)		(11)			(6)		
大学共同利用機関法人												
独立行政法人等公的研究機関												
民間機関												
外国機関												
その他 ※		2					3					
計		0	17	2	0	3	0	122	14	0	24	0
		(4)	(0)	(0)	(2)	(0)	(31)	(0)	(0)	(11)	(0)	
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数 0 とカウントし、この欄の記載不要												

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	1		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
京都府立大学学術報告「人文」	1	R3. 12	近世後期天草郡高浜村における疱瘡流行と迫・家への影響	東昇
みんなのねがい	1	R4. 2	慢性と急性——人文学的省察	藤原辰史
官能の人類学	1	R4. 3	ゾーエーの海に身を浸す	石井美保
アレ	1	R3. 11	「食べること」と「信じること」	藤原辰史
REKIHAKU	1	R3. 10	日本列島と天然痘	香西豊子
史学雑誌	1	R3. 10	仏教教団の「近代化」における門信徒の経済的役割：明治期・西本願寺「有力門徒」らによる会社設立	池田 さなえ

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
新谷卓, 中島浩貴, 鈴木健雄 編著「歴 史のなか のラディ カリズ ム」	1	R3. 6	1920／1930年代 反体制派 のなかの反対派―「転向」と「山 川イズム」、左派社会主義労働組合 運動	Till Knaudt

本年度 共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
ポストコロナの生命 哲学	藤原辰史、福岡伸 一、伊藤亜紗	R3. 9	集英社新書
官能の人類学	石井美保、岩谷彩子 他	R4. 3	ナカニシヤ出版

#### 11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

4～5回のオンライン講座を開催する予定だったが、コロナ禍による活動の停止要諦などで、実施することができず、半分弱の費用を使用することができなかった。

#### 12. 次年度の研究実施計画

次年度は、オンライン講座を班員のみならず、非班員にも加わっていただき、より充実させつつ、研究の成果を社会に還元していきたい。また、引き続き、年に10回程度の定例会を開き、各自の研究の関心に沿った感染症をめぐる発表をしてもらい、議論を深めたい。また、最終年度の何らかの成果の刊行に向けて、それぞれのテーマも絞っていく予定である。

#### 13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	10	5	200000
	一般旅費	5	5	100000
海外旅費	渡航旅費	0	0	0
	招へい旅費	0	0	0
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				200000
消耗品等経費				100000
その他				150000
合計				750000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度は、本年度よりもオンライン講座を活性化させ、大学の外に成果を開いていきたい。また、それによって、民間で保存されている史料情報の収集も進めていきたい。